



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『藤氏家伝』における道賢作の誄：表現の意味と出典を中心に
Author(s)	馬, 駿
Citation	国語国文研究, 133, 1-11
Issue Date	2007-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93369
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_133-01-11.pdf



『藤氏家伝』における道賢作の誄

——表現の意味と出典を中心に——

馬

駿

—

天平宝字四年（761）正月から同六年（763）二月までの間に成立したと考えられている¹『藤氏家伝』は上巻「大織冠伝」と下巻「武智麻呂伝」からなるが、上巻の末尾に別巻として「貞慧伝」が付けられている。「貞慧伝」における道賢作の誄は下巻の「武智麻呂伝」に収載の刀利康嗣の積奠文とともに貴重な資料となっている。道賢作の誄の表現の意味と出典に関しては、小島憲之氏の『上代日本文学与中国文学 下』（以下、「小島説」と略す）や『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』²（以下、「注釈と研究説」と略す）などのすぐれた研究が挙げられるが、完全な解明には至っていないのが現状のようである。例えば、通説では「諫魚諫鼎、乃傳乃伯」の故事を、臧信伯だけの所為に限定して解釈し、『列子』周穆王の寓話を「世路芭蕉」の典故として引き、「車珠去魏」の出典を

『芸文類聚』引用の『戦国策』や『史記』張儀伝の記事に求める、といった問題がそれである。果たしてそれで正しいであろうか。そこで、本稿は出典論の立場から従来の説に批判を加えつつ、この三句の意味と表現の特徴を捉えてみたい。

二

さつそく、道賢作の誄を掲げてみよう。

△ (1) 維白鳳十六年歲次乙丑十二月廿三日、春秋若干、卒於大原殿下。嗚呼哀哉。乃作誄曰、(2) ① 於穆丕基、經綸光宅。懿矣依仁、翼修軌格。軒冕籍甚、謨宣廟略。惟岳惟海、如城如嶂。諫魚諫鼎、乃傳乃伯。積善余慶、貽厥哲人。② 問道西唐、練業泗浜、席間函丈、覃思秀神。荆山抱玉、弁氏申規、漢水藏珠、龍子報隨。寶于王庭、上國揚輝。爰受朝命、建節來儀。胥爾方新、橋父猶煥、近署多士、紫微壯觀。四門廓略、三端

雅亮。王事靡盬、將酬国宝。(3)①世路芭蕉、人間闔城。鼠藤

易絶、蛇篋難停。蘭芝春萎、松竹夏零。鳳遭繳射、鸞掛網刑。

嗚呼哀哉。②顔回不幸、謂天喪予。延陵葬子、称其礼与。書

筆猶存、身精何処。覩物思人、堂下莫叙。嗚呼哀哉。車珠去

魏、城壁辭趙。才云可惜、日還當暮。嗚呼哀哉。

道賢作の誄は整然とした韻文で、画一された四言の句の形を取っており、五十五句あり、二百二十の文字からなっているが、日本文学史において、現存する資料の中で漢文による最も古くて、内容・形式の完備した誄として注目し値するものだと言える。

作者はこの誄でまず、大いなる基礎を築き、天下を治めた天智天皇についてその徳が四方に満ち及んだことから筆を起す。それから、貞慧の父たる藤原鎌足の事跡が後に続く。鎌足が、天子の政治を輔佐し、法律を助け整え、高位高官としての名声の盛んなことを讃える。また、鎌足が、朝廷の政策を詮議し、山と海のような靈氣を生まれながらに受け、城や城壁の如く、国家を守り、臧儔伯と臧哀伯と同じく天皇の行動を諫めることを賛美する。かくして、鎌足の積んだ善行により、福が藤原氏の子孫に及ぶのである。

次に、筆を誄の対象となる貞慧の生涯の回顧とその功德の賛美に移す。貞慧は学業に熟達し、孔子ゆかりの泗浜で儒学を修め、思索を深め、精神が勝り、まさに「荆山之玉」と「隋侯之珠」のような優れた才能の持ち主である。貞慧は日本の遣使として唐を訪れ、長安の朝廷でその名を馳せる。貞慧により唐と日本の関係の親密さが新たになり、貞慧の活躍のゆえに父である鎌足の徳操がいよいよ明らかにになる。そして、当時の近江朝廷は有能な人材が豊富で、貞慧

も王室に関する仕事を堅固・厳密に務めて席暖まる暇もなく、官人・臣下として求められる徳行を積むように努めたとする。

最後に、貞慧の死の哀悼を以って誄の結びとする。人生は短くてはかない。人間の命も脆くて消えやすい。生命は無常で、本来枯れることのない植物である「蘭芝」「松竹」が萎えて枯れてしまうのと同然で、不死鳥である「鳳」「鸞」がその生命の危機に瀕するが如く、有徳の人は死を迎える。そして、作者は、顔回が死んだ時孔子が再三嘆息した故事や、呉の季札が長子を葬った時、礼に適っているのを孔子が感心した故事を引いて、「車珠」と「城壁」のような名玉に比すべき貞慧の死を悼むのである。⁵⁾

上來、見てきたように、当該誄は、(1)散文の小序、(2)世系行業を先に述べる。具体的には、①死者の世系の追遡(鎌足を中心とするもの)と②死者の生涯の回顧(貞慧を中心とするもの)という二構成。(3)哀傷の意を終に寓する。これまた、①人生無常の詠嘆と②死者哀悼の意の陳述という二構成、である。漢籍の誄の構成の特徴を考え合わせれば、『藤氏家伝』における道賢作のこの誄は形式と内容と用語において、頗る規範を成している誄だと見做し得るのではないかと思う。

三

さて、道賢作の誄の表現の典故をめぐる先行研究についてだが、ここでは、便宜上従来の説を「經史子集」の形でまとめてみた。

(1)、「經」。1、『周易』「經綸」、「積善余慶」、「賓于王庭」

2、『尚書』「丕基」、「光宅」、「貽厥」、「覃思」（序文）、「來儀」

3、『毛詩』「於穆」、「王事靡盬」

4、『礼記』「席間函文」、「延陵葬子、称其礼与」

5、『左伝』「諫魚諫鼎、乃僖乃伯」、「胥齒」、「国宝」、「堂下莫叙」

6、『論語』「依仁」、「顔回不幸、謂天喪予」

(2)、『史』

1、『史記』「泗濱」、「建節」、「車珠去魏」、「城璧辭趙」

2、『後漢書』「揚輝」

3、『魏志』「雅亮」

4、『晋書』「廟略」

5、『北史』「四門」

(3)、『子』

1、『列子』「世路芭蕉」

2、『淮南子』「荊山抱玉、弁氏申規、漢水藏珠、龍子報隨」、「蘭芝」

3、『說苑』「橋父」

4、『韓詩外伝』「三端」

5、『新論』「練業」

6、『神仙伝』「廓略」

(4)、『集』

1、『文選』「軒冕」（王仲宝「褚淵碑文一首」）、「籍甚」（刘孝標「広絶交論」）、「荊山抱玉、弁氏申規、漢水藏珠、龍子報隨」（曹子建「与楊德祖書」）、「橋父」（任彦昇「王文憲集序」）、「近署多士」（孔文舉

「薦弥衡表」、「紫微」（王文考「魯靈光伝賦」）、「鳳遭繳射、鸞挂網刑」（陸士衡「演連珠」、「文賦」）

2、『翻訳名義集』「鼠藤易絶、蛇篋難停」

3、『初学記』「懿矣」。

(1)の「経部」に注目すると、用語や表現の出典に関する指摘は、例えば、『周易』「尚書」『詩経』「礼記」『左伝』『論語』といったものが見られる。同じように、出典の指摘はまた「史部」「子部」「集部」のさまざまな経文や文章に及んでいる。このことは道賢作の詠における表現の豊富さを物語るに十分だろう。また、未だに明らかにされていないものがいくつかあるけれども、全体として、本文解釈に限って考えるならば、道賢作の詠についての出典研究はほとんど言い尽くされていると言っても過言ではないであろう。

ところが、詠という特殊な祭文の文体から道賢作の詠を考える場合、道賢作の詠の表現をめぐって、先行する祭文にしばしば登場する同質のものをどう取り扱うかの問題もあり、また、すでに出典として指摘されたもので説が分かれているものを如何に判断すべきかの懸案も見られる。さらに通説の中でも改めて再検討すべきものがある。以下、主として道賢作の詠の三句、「諫魚諫鼎、乃僖乃伯」、「世路芭蕉、人間闔城」と「車珠去魏、城璧辭趙」に焦点を絞って、考察を行なっていくことにする。

まず、「諫魚諫鼎、乃僖乃伯」について、「小鳥説」は、

○「諫魚」云々は、鎌足を臧儋伯にたとへたもの、儋伯が隠公の漁場を見ようとした時、中止するやうに諫めたためた故事（左伝、隠公五年の条）。諫鼎は、鳥獸は品の低いものであるため

と唱えている。「注釈と研究説」も

也。

べきではなからうか。

紼、綖、昭其度也。藻、率、鞞、鞶、厲、游、纓、昭其

其若之何？」公不聽。

大きな鼎を祖先祭りの殿堂に置くことほど悪質な賄賂はない

ではないか、と。しかし、桓公は臧哀伯の諫言に一切耳を貸さない。臧哀伯の「諫鼎」は臧僖伯の「諫魚」と共に『左伝』の有名な諫言の話としてよく知られており、他の文献にも見られる。次の『文選』と『芸文類聚』の例がそれである。

△ 御史中丞臣任昉稽首言、臣聞馬援奉嫂、不冠不入、汎毓字孤、家無常子。是以義士節夫、聞之有立、千載美談、斯為稱首。／李善注『左氏伝』、臧哀伯曰、武王克商、遷九鼎於洛邑、義士猶或非之。『文選』卷四十任彦昇「奏彈劉整一首」

△ 又曰、宋華父督以郕大鼎賂公、納於太廟、非礼也。臧哀伯諫曰、君人者、將昭德塞違、以臨照百官、猶惧或失之、故昭令德以示子孫。百官於是乎戒惧而不敢易紀律。今滅德立違、而實其賄器於太廟、以明示百官、百官象之、其又何誅焉？國家之敗、由官邪也。官之失德、寵賂彰也。郕鼎在廟、彰孰甚焉？（『芸文類聚』卷三十四、人部八、諫）

さらに、注目すべきは漢籍では臧僖伯の「諫魚」と「臧哀伯の「諫鼎」を、次の例のように常に対句の形で表わす習わしがあったことである。

△ 公諱懷亮、字時明、東莞莒人也。其先派於后稷、演於周公、泊魯孝公子臧、因而為氏。昔僖伯隱觀、哀伯諫桓納鼎。魯多君子、視履考祥、是以知其有後矣。¹²（李邕「羽林大將軍藏公墓志銘」）

△ 公諱希晏、字恭靖。先封受氏、奕葉重光、僖伯諫魚、哀伯諫鼎、文仲立德、武仲立言。¹³（張孚「金紫光祿大夫左金吾衛將軍贈揚州大都督臧府君神道碑銘」）

かくして見てくると、「諫鼎」の出典は『左伝』桓公二年、その主人公は臧僖伯の弟臧哀伯、諫言の対象は隱公の弟桓公とすべきではないかと考える。

次に、「世路芭蕉、人間闌城」の解釈に移ろう。「小島説」は「世路芭蕉」に関して、

○ 世の中は芭蕉の葉に置く露の如くはかなく、人間はあの世へと逝く、生命は堪え絶え¹⁴。

と解釈する。対して、「注釈と研究説」は、

○ 「世路」は世の中、処世の道の意。「芭蕉」は夢のようにほかないことの喩え。『列子』周穆王「鄭人有新於野者。遇駭鹿、御而擊之。斃之。恐人見之也、遽而蔵諸隱中、履之以蕉、不勝其喜。俄而遺所蔵之處、遂以為夢焉」¹⁵。

と、具体的な出自を指摘している。一方、「人間闌城」の意について、「注釈と研究説」は

○ 「人間」は人の世、世間の意。人生は城の門を通り抜けるように、あつという間であるの意。¹⁶

と主張するが、証拠とするに足る資料を出していないのは疑問が残る。

さて、「世路芭蕉」の解釈にあたつて、「注釈と研究説」が典拠として引いている『列子』周穆王はたしかに当該寓話のテーマにも関わるものと思われるので、繁をいとわず全文を掲げてみることにする。

△ 鄭人有新於野者。遇駭鹿、御而擊之、斃之。恐人見之也、

遽而藏諸隍中、覆之以蕉、不勝其喜。俄而遺所藏之處、遂以爲夢焉。順途而咏其事。傍人有聞者、用其言而取之。既帰、告其室人曰、「向新者夢得鹿、而不知其處。吾今得知、彼真夢矣。」室人曰、「若將是夢見新者之得鹿邪？詎有新者邪？今真得鹿、是若之夢真邪？」夫曰、「吾捫得鹿、何用知彼夢我夢邪？」新者之帰、不厭失鹿。其夜真夢藏之之處、又夢得之之主。爽旦、案所夢而尋得之。遂訟而爭之、帰之士師。士師曰、「若初真得鹿、妄謂之夢、真夢得鹿、望謂之寔。彼真取若鹿、而與若爭鹿。室人又謂夢認人鹿、無人得鹿。今捫有此鹿、請二分之。」以聞鄭君。鄭君曰、「嘻！士師將復夢分人鹿乎？」訪之國相。國相曰、「夢与不夢、巨所不能辯也。欲辯覺夢、唯黃帝、孔丘、今亡黃帝、孔丘、孰辯之哉？且恠士師之言可也。」¹⁷

再度『列子』周穆王の表現と趣旨に執するならば、氣になる点が三つある。即ち、一つ目は、原文の「覆之以蕉」の蕉を蕉を以て覆ふの「蕉」は本当に「注釈と研究説」に言う芭蕉の意味なのか、二つ目は、この寓話のテーマは何か、三つ目は、表現上「世路芭蕉」の句を「人間闔城」の句と如何に関連して解釈していいか、という三点である。

まず、一つ目の問題について、清の時代の訓詁学者黄生は「覆之以蕉」の「蕉」をめぐって『字詁義府』という著書で『莊子』人世間の例を引き合いに、次のように、

△蕉樵古字通用。取薪曰樵。謂覆之以薪也。莊子人世間：「死者以国量乎沢若蕉。」字与此同、謂死人骨如積薪也。今以蕉字爲芭蕉用、而相如子虚賦但作巴且。¹⁸

と指摘する。これによると、「蕉」と「樵」は古い字では相通じ、薪を取るのを「樵」というので、問題の「覆之以蕉」の句は薪をもつて覆い隠すの意味だということになる。だとすると、「覆之以蕉」の「蕉」を芭蕉の意に取る「注釈と研究説」はこの場合、再考する必要がある。芭蕉の意に取る「注釈と研究説」は、中原の地に位置する鄭の国では、芭蕉のような南方の植物の生存は所詮あるはずがない点も考慮に入れる必要もあるであろう。二つ目の問題点、『列子』周穆王のテーマに関しては、人間としては夢を見ている時であろうと、目覚めている時であろうと、全く同じであつて、是と非を弁える必要がない、というのも、そもそも是と非を弁える基準そのものがないからである——これが『列子』周穆王のテーマである。この点から見ても、「世路芭蕉」の意味を夢のようににはかないことの喩えだと見る「注釈と研究説」に疑問を抱かざるを得ない。三つ目の問題は「人間闔城」の意味を明らかにした上で捉えてみたい。

では、「世路芭蕉、人間闔城」とは一体何を意味するのだろうか。その表現の発想はどこから来たのだろうか。本稿は当面の二句を、仏典の組み合わせの表現として捉えるべきだと考える。以下、その論証を展開してみたい。

「芭蕉」は仏典では人間の身を無実の（実質のない）ものとして喩えたものの一つである。そうした意味での「芭蕉」の意味・用法を、次のように整理してみた。

- (1) 身を芭蕉に喩える例
- △是身不堅猶如蘆葦蘭水泡芭蕉之樹。¹⁹（『大般涅槃經』卷一）
- △水者喻身受苦如水上泡。陸者喻身不堅如芭蕉樹。其山谷者

煩悩中修無我想。(『大般涅槃經』卷九)

(2) 世間を芭蕉に喩える例

△ 咄世間無常。如水月芭蕉。功德滿三界。無常風所壞。(『大

智度論』卷二)

△ 無常不堅固。如芭蕉水沫。(『法苑珠林』卷四十四)

(3) 生死を芭蕉に喩える例

△ 生死無有実。猶如芭蕉林。(『經律異相』卷十八)

上の例文の波線と傍線で示されているように、人間の生命の脆さ、生死の測りがたさ、世間の無常を芭蕉に喩えて用いるのは、仏典ではごく一般的な表現になっている。そして、身・世間・生死を芭蕉に喩えるという発想は、

△ 譬如士夫持斧入山。見芭蕉樹。謂堪材用。断根。截斫葉葉。

剥皮。求其堅実。剝至於尽。都無堅処。(『維阿含經』卷九)

△ 是身如芭蕉中無有堅。芭蕉之草。但有皮葉。無真実也。身

亦如之。但仮名字。亦無真実。(『維摩經義疏』卷二)

△ 芭蕉(上「栗—木十朔」麻反下子消反王逸注楚辭云香草名

也生交趾葉如席煮可紡績也亦不堅之草也所以經文指以為喩也

文字典說二字並從草巴焦皆声也)。(『一切經音義』卷四十一)

△ 行如芭蕉葉葉求之中無有堅。想如遠見野馬無水有心想。(『翻

訳名義集』卷四)

とあるように、芭蕉という植物に葉っぱがあるだけで、実(幹)がないことに由来するのである。さらに、

△ 猶如聚沫猶如水泡。猶如陽焰猶如芭蕉。如狂如醉。如害如怨。如飲尿友喻。如仮子喻毒蛇篋。是空無願遠離無取虚偽不

堅。(『瑜伽師地論』卷七十四)

△ 是身如聚沫澡浴強忍。是身如泡不得久立。是身如野馬渴愛

疲勞。是身如芭蕉中無有堅。是身如幻転受報応。是身如夢其

現恍惚。是身如影行照而現。是身如響因縁變失。是身如霧意

無静相。是身如電為分散法。是身無主為如地。是身非身為如

火。是身非命為如風。是身非人為如水。是身非有四大為家。

(『仏說維摩詰經』卷一)

といったような、芭蕉と「蛇篋」との組み合わせの用例があることも見逃すわけにはいくまい。このことは、「芭蕉」がいつも、道賢作の誄の「鼠藤易絶、蛇篋難停」にも見えるように、「蛇篋」(地水火風の四元素からなる人間の意)とセットで表現されていることを物語り、「芭蕉」を仏語の表現と見るのに格好な材料となるだろう。

続いて、「人間闍城」の意味・用法についての検討だが、結論を先に述べると、この「闍城」は仏典で言う「乾闥婆城」のことを指し、上句の「世路芭蕉」と対句を成して、共に生命の脆さと世間の無常を言い表すものと押えたい。「乾闥婆城」は『一切經音義』卷一によると、

△ 尋香城(古訳名乾闥婆城。其城郭多於平沢海浜。或於空

曠砂漠絶人境処。化現似城遠望分明。近観即滅。如波浮雲陽

氣之類)。

とあり、遠くから見れば、城のような形がくつきり見える反面、近寄って見れば、すぐ消えてしまふ、恰も浮雲や陽炎のようなものだという。これは明らかに蜃気楼(仏典では「蜃楼台」)を意味する。また、『翻訳名義集』卷三の

△ 乾闥婆城。…乾城俗云蜃氣。蜃大蛤也。朝起海洲。遠視似有。近看即無。

の記述によって、「乾城」は「乾闥婆城」の略称であることを知る。「乾闥婆城」と「乾城」は前述した「芭蕉」と同じく、仏典で世の人が執念をもつて追求した、幻滅的なものを比喩的に言い表す習わしがある。例えば、次の用例は、

△ 是身如掣電。類乾闥婆城。（『諸法集要經』卷二）

△ 生死無実如乾闥婆城。（『摩訶摩耶經』卷一）

△ 水沫難摩。乾城空有状。是生非至理。是我皆虚妄。求之不可得。誰其受業障。信矣大医王。茲力誠無量。（『広弘明集』

卷三十）

△ 乾城無片実。渴鹿諍焰塵。息心上空響。廃念心源真。（『法

苑珠林』卷五十二）

とある如く、身・世間・生死を「乾闥婆城」・「乾城」に喩えて用いるのである。しかも、そうした意味での「乾闥婆城」・「乾城」の用法には「芭蕉」と並べて使われる例文が数多くある点は特に注目されなければならないかと思う。例えば、

△ 当觀是身。猶如芭蕉熟時之炎。水泡幻化乾闥婆城壞器電光。

（『大般涅槃經』卷二）

と見える如く、「芭蕉」と「乾闥婆城」の並列的な使い方は道賢作の対句を成すような、「世路芭蕉、人間闥城」の表現と軌を一にするものだと言つてよからうし、道賢作の「闥城」という用語も仏語の「乾闥婆城」を縮約したものだとして差し支えないだろう。言つてみれば、僧侶としての道賢は当該誄で芭蕉のような人生のはかなさと、

蜃気楼のような生命の消えやすさを嘆くのに仏典にある常套表現を踏襲して用いたのである。

最後に、「車珠去魏、城壁辞趙」の出典問題に注目しよう。諸説は次の通り。

○ 「車珠去魏、城壁辞趙」は名玉に比すべき彼の死を故事によつて表現したもの。前者は百乘の車と夜行の珠を与えられ、生国魏を去つて、合従連衡の説を唱へて諸国を廻つた張儀の故事をさし「小島注 史記張儀列伝、芸文類聚（璧）引用の戦国策の記事など参照」、後者は、秦昭王が十五城を交換して趙の恵文王所蔵の和氏の璧を得ようとした所謂連城の璧の故事「小島注 史記藺相如列伝、芸文類聚（璧）引用の戦国策の記事など参照」（対句からみて「城壁」は「城壁」の誤写か）をさし、くづれ落ちた彼の死をさす。（「小島説」）

○ 「車珠」は、百乘の車と夜光の珠をいう。魏の張儀が生国を離れ、楚国にいたときに璧玉紛失の嫌疑をかけられた故事（『史記』張儀伝）。その百乘の車や名玉にも比すべきものとして、貞慧の死を悼む。『芸文類聚』后妃部・后妃・謝莊孝武帝宣貴妃誄「照車去魏、聯城辞趙」。（「注釈と研究説」）

このように、「小島説」と「注釈と研究説」はいずれも張儀の故事に「車珠去魏」の出典を求めているが、具体的な史実の認定に食い違いがある。「小島説」は『芸文類聚』（璧）引用の『戦国策』の記事を踏まえているので、一応の合理性が認められるようだが、ただ、なぜ誄の文体に張儀のこの故事を用いることが可能なのか、という

不安がないわけでもない。一方、璧玉紛失の嫌疑をかけられたという不面目ともいえるべき張儀の故事を、貞慧の死去の記事を典拠とすることが妥当か、「注釈と研究説」に対する素朴な疑問が筆者にはある。しかも、張儀のこの故事に出てくるのは「珠」だけであつて、「車」とは何ら関係がない。²³

「注釈と研究説」にも『芸文類聚』の引用があるが、『文選』卷五十七、謝希逸「宋孝武宣貴妃誄一首并序」に「惟大明六年、夏四月壬子、宣貴妃薨。律谷罷暖、龍鄉輟曉。照車去魏、聯璧辭趙」とあり、李善注に

△ 史記曰、齊威王与魏惠王会田於郊。魏王問曰、王亦有宝乎？

威王曰、無有。魏王曰、若寡人、小国也、尚有径寸之珠、照

車前後十二乘者十枚。奈何以万乘之国而無宝乎？又曰、趙惠

文王得和氏璧。秦王聞之、使遺趙王書曰：願以十五城易璧。

趙王遂使相如奉璧西入秦。²⁴

と見え、それぞれ『史記』卷四十六、田敬仲完世家と『史記』卷八十一、藺相如伝を引いて注釈が施されている。謝希逸作の「照車去魏、聯璧辭趙」の二句を句法から分析してみると、「照車」と「聯璧」は主語で、「去」と「辭」は述語で、「魏」と「趙」は目的語であることが分かる。「照車」と「聯璧」は趙と魏の二国にとって無価のものなので、それが「去・辭」ることこそ最も珍重に値されるものを失うの意味する以外の何物でもない。掛け替えないものの喪失を宣貴妃の逝去に喩えて用いるのがまさに謝希逸作の二句の狙いである。

なるほど、謝希逸作の「照車去魏、聯璧辭趙」と道賢作の「車珠

去魏、城璧辭趙」の二句を比較すれば、「照車」と「車珠」、「聯璧」と「城璧」といった違いのあることを、まず認めなければならない。ただ、その違いはあくまでも類義語または同義語の置き換えに過ぎず、二者の表現そのものに意味的な変化をもたらすほどのものではない。決してない。それよりむしろ詠という同じ文体、似たような比喩法及び一致した句法を共有する、という二者の類似点が大いに注目されるべきではないかと思う。

従って、本稿は一案として、李善注の尊重の立場と、「照車去魏、聯璧辭趙」といった漢籍の祭文における常套表現の存在²⁵への配慮から、「車珠」を原典の「照車」の一種の変容と見、道賢作の詠の「車珠去魏」の出典を、『史記』田敬仲完世家の故事に求めたい、という考えである。

【付記】本稿は二〇〇六年二月一〇日北京師範大学と東京学芸大学の共催で行われたシンポジウムでの口頭発表および、二〇〇七年北海道大学国語国文学会平成十九年度大会で発表したものに加筆したものである。発表に際し、会場の皆様方から少なからぬ教示を賜ったことに、心より御礼申し上げます。

注

1 『日本古典文学大辞典』（簡約版、第369頁、岩波書店、1986年）

2 小島憲之『上代日本文学与中国文学下』（第1404頁、1408

- 頁、塙書房、1965年)
- 3 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』(第280頁、286頁、吉川弘文館、1999年)
- 4 今回の考察は誄の韻文の部分のみを取り扱ったもの。
- 5 誄の現代語による釈義は沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』の語釈を主として参照した。
- 6 例えば、「翼修」、「軌格」、「謨宣」、「惟岳惟海、如城如郭」、「申規」、「上国」、「人間闔城」、「蘭芝春姿、松竹夏零」、「書筆猶存、身精何処。親物思人、(堂下莫叙)」、「才云可惜、日還當暮」などがそれに当たろう。
- 7 小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』(第1406頁)
- 8 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』(第283頁)
- 9 『十三経注疏 下冊』(第1741頁、1743頁、中華書局、1980年)
- 10 [梁]蕭統編[唐]李善注『文選』(第560頁、中華書局、1977年)
- 11 [唐]歐陽詢撰『芸文類聚』(第432頁、433頁、上海古籍出版社、1999年)
- 12 『全唐文』(第2691頁、中華書局、1983年)
- 13 『全唐文』(第3706頁)
- 14 小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』(第1407頁)
- 15 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』(第287頁)
- 16 注15に同じ。
- 17 楊伯峻撰『列子集解』(第107頁、108頁、中華書局、1979年)
- 18 引用は楊伯峻撰『列子集解』(第107頁)に拠る。
- 19 以下、仏典の用例の引用はすべて『CBETA電子仏典2006』(中華電子仏典協会)に拠る。
- 20 他に、「仏説觀心三昧海經」卷九に「此想成已当作是念。諸仏世尊住大寂滅。身心清淨無來無去。如我身者。四大五陰所共合成。如芭蕉樹中無堅實。如水上沫。如水中月。如鏡中像。如熱時焰如野馬行。如乾闥婆城。」、『六十頌如理論』卷一に「癡闇大惡城。如芭蕉不實。如乾闥婆城。皆世幻所見。」、『福蓋正行所集經』卷一に「猶如夢境。幻化陽焰。乾闥婆城。及旋火輪。如彼芭蕉。中無有實。如水上沫。須臾散壞。」、『寶頭盧突羅闍為優陀延王說法經』卷一に「一切五欲。体性実苦。皆從妄想而生於樂。何有諸行不似芭蕉建闍婆城。」などの例がある。
- 21 小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』(第1408頁)
- 22 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝 注釈と研究』(第289頁、290頁)
- 23 張儀已学而游説諸侯。嘗從楚相飲、已而楚相亡璧、門下意張儀、曰：「儀貧無行、必此盜相君之璧。」共執張儀、掠笞數百、不服、釋之。其妻曰：「嘻！子毋説書游説、安得此辱乎？」張儀謂其妻曰：「視吾舌尚在不？」其妻笑曰：「舌在也。」儀曰：「足矣。」

〔漢〕司馬遷撰『史記』卷七十、張儀伝、第2279頁、中華書局、1959年

24 〔梁〕蕭統編〔唐〕李善注『文選』（第793頁）

25 于志寧「大唐故太子右庶子銀青光祿大夫国子祭酒上護軍曲阜憲公孔公碑銘」に「厥一字漢皇之名珠、光映照車之珣。抱金山之美玉、価重連城之器。」（『全唐文』、第144頁）、「隋豫州保城県丞支君墓志銘」に「魏后照車之珠、無以方其光価。秦王見胆之鏡、不足比其鑑明。」（主編周紹良 副主編趙超『唐代墓志匯編 上』、第293頁、上海古籍出版社、1992年）などがある。

（ま しゅん・対外経済貿易大学教授）